



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

### 第 26 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1 靖国神社遊就館内・地階

電話 03 (6380) 8943  
FAX 03 (6380) 8952

<http://homepage2nifty.com/ireikyuu>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能

発行人 柚木文夫

印刷所 ヨシダ印刷株式会社

### 目次

会長就任のご挨拶(島村宜伸新会長)……	2
残暑お見舞い・役員等名簿……	1
平成24年度大東亜戦争全戦没者 合同慰霊祭……	3
平成24年度千鳥ヶ淵戦没者墓苑 拝礼式……	6
遺烈……	7
日米合同硫黄島戦没者慰霊追悼 顕彰式について(抄)……	9
新刊図書紹介……	12
事務局からの報告等……	14

## 会長就任のご挨拶



島村宜伸新会長

戦没者慰霊諸団体、協議会会員・役員並びに関係者の皆様には日頃、当公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の活動に、多大のご協力ご支援をいただき、心から感謝申し上げます。

さて、私こと島村宜伸は、関係諸団体・諸先輩のご推薦並びに4月23日の臨時理事会のご推挙を得て、本協議会会長の重責を担うことになりました。去る1月17日の前代表理事山本卓眞氏ご逝去の後、本協議会においては定款

を変更して新たに「会長」の職を設け、その最初の会長の任を私が務めることになった由、その責務の重大さに改めて身の引き締まる思いがいたします。

ともあれ、長年戦没者の慰霊顕彰活動に精魂を傾けて来られた戦没者慰霊諸団体の先輩の皆様とご一緒に、これから戦没者慰霊の活動にご奉仕できることを喜びとし、精一杯、会長の務めを果たす所存でございますので、よろしくご協力の程をお願い申し上げます。

先の大東亜戦争においては、多数の将兵が、祖国の安寧と民族の幸せを念じつつ戦場に赴き、北は酷寒の地、南は酷暑瘴癘の地で、雄々しく戦い、散華されました。また、多くの方々も戦

災の犠牲となられました。その数、国内外を合わせて約310万人に及びます。これらの尊い犠牲が礎になって今日の我が国の平和と繁栄があることに思いを致すとき、戦没者に対し、敬意

と感謝の念を忘れることなく慰霊の誠を捧げ、それを次の世代に伝えていくことこそ、今に生きる私達国民の責務であると考えます。

しかしながら、大東亜戦争が終結して既に67年、世界屈指の平和と豊かさを享受している日本国民の中では、大東亜戦争そのものが遥か遠い過去となり、大東亜戦争戦没者に対する感謝と慰霊の心が忘れられつつあることが懸念されます。それにもまして、かくも

- 多くの方々が増え続けていることが危惧され、また長年、戦没者慰霊に携わって来られた方々の高齢化、更にはご他界者の増加傾向も避けられないのが現実です。関係者のご努力にも拘わらず、戦友会、遺族会等で、会員の高齢化と減少により、余儀なく解散される団体も逐次増えつつあります。このままでは、この国の戦没者慰霊活動
- ① 戦没者慰霊団体合同で行う慰霊祭の実施
  - ② 戦後長期化に伴う戦没者慰霊事業の在り方の研究と研究成果の慰霊事業への反映
  - ③ 戦没者崇敬の思想普及
  - ④ 民間建立海外慰霊碑の維持・慰霊等の方法の研究と慰霊の実施
  - ⑤ 慰霊諸団体の慰霊事業についての連絡調整と協力
  - ⑥ その他本協議会の目的を達成する

に必要な事業

- ・ 戦没者遺骨収容・遺骨情報収集、海外慰霊巡拝への協力
- ・ 協議会運営基盤の確保（参加団体・賛助会員の獲得確保）
- ・ その他

創設後7年を経過し、この間、公益財団法人への移行の洗礼も受けました

### 残暑お見舞い 申し上げます

**公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会**

会長 島村宜伸  
理事長 柚木文夫

**公益財団法人 偕行社**

理事長 志摩篤  
副理事長 塩田章  
副理事長 福田一彌  
専務理事 深山明敏  
事務局長 白石一郎  
若木利博

が、本協議会設立の趣旨、関係方面からの協議会への期待は何ら変わることはないと思っております。課題の重大さに比して弱体な協議会の現状に鑑み、悩みは尽きませんが、設立時の初心を忘れず、出来ることから一つずつ前向きに積み上げて参る所存であります。就任間もない私自身、勉強不足、

### 公益財団法人 水交会

会長 夏川和也  
理事長 藤田幸生  
副理事長 森本茂夫  
専務理事 齋藤隆  
事務局長 本多宏隆

### 航空自衛隊退職者団体 つばさ会

会長 竹河内捷次  
副会長 杉山修弘  
副会長 山本修三  
副会長 小田邦博  
副会長 藤川壽夫  
副会長 奥村佐登志  
専務理事 小鹿勝見  
副専務理事 浦山長人

状況把握不十分の面はお詫び申し上げます、今後、皆様のご指示とお力添えをいただきながら務めを果たして参りますので、よろしくご協力の程を、重ねてお願い申し上げます。

平成二十四年四月

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会  
会長 島村 宜伸

### 【島村宜伸新会長の略歴】

- ・ 昭和9年東京都生まれ
- ・ 学習院大学政経学部卒
- ・ 学習院在学間、皇太子明仁親王殿下（今上陛下）の御学友
- ・ 中曽根康弘防衛庁長官（当時）の大秘書官
- ・ 前衆議院議員（昭和51年初当選、以来当選9回）（自由民主党）
- ・ 文部大臣、農林水産大臣（2回）、衆議院予算委員長、自由民主党国会対策委員長、自由民主党衆議院議員総会長などを歴任。
- ・ 初代・日本会議国会議員懇談会会長
- ・ 前「みんなで靖國神社に参拝する国会議員の会」会長
- ・ 現在、(財)日本プロスポーツ協会会長、大相撲新生委員会委員長など

### 公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会 役員等名簿

(平成24年7月1日現在)

(五十音順)

会長	島村 宜伸	理事	赤木 衛	常務理事	岩田 司朗 (常勤)
副会長	柚木 文夫 (常勤)	理事	小田 邦博	常務理事	富田 定幸
副会長	藤田 幸生	理事	山口 浄秀	常務理事	阿部 軍喜
副会長	森本 茂夫	理事	阿部 軍喜	常務理事	秋山 眞一
副会長	齋藤 隆	理事	新井 光雄	常務理事	新井 光雄
副会長	本多 宏隆	理事	内田 健児	常務理事	内田 十允
専務理事		理事	杉山 蕃	常務理事	杉山 蕃
副専務理事		理事	中島 又雄	常務理事	中島 又雄
		理事	福田 一彌	常務理事	福田 一彌
		理事	新井 剛	常務理事	新井 剛
		理事	齋須 重一	常務理事	齋須 重一
		理事	竹之下 和雄	常務理事	竹之下 和雄
		理事	堀江 正夫	常務理事	堀江 正夫
		理事	池邑 正男	常務理事	池邑 正男
		理事	菊地 勝夫	常務理事	菊地 勝夫
		理事	山本 隆之	常務理事	山本 隆之
		理事	奈良 保男	常務理事	奈良 保男
		理事	板垣 正	常務理事	板垣 正
		理事	下山 敏郎	常務理事	下山 敏郎
		理事	羽佐間 重彰	常務理事	羽佐間 重彰
		理事	松島 トモ子	常務理事	松島 トモ子
		理事	名譽相談役 大久保 隆	常務理事	名譽相談役 大久保 隆
		理事	相談役 (公財) 偕行社代表	常務理事	相談役 (公財) 偕行社代表
		理事	相談役 (公財) 水交会代表	常務理事	相談役 (公財) 水交会代表
		理事	つばさ会代表	常務理事	つばさ会代表



平成24年7月7日(土) 正午より、靖國神社において、当協議会並びに当協議会参加諸団体の主催による、平成24年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」が、御来賓、参加各団体代表、賛助会員等約180名の参加を得て、厳粛かつ盛大に斎行された。



祭文を奏上する島村宜伸新会長

今年も昨年に引き続き、JYMA (日本青年遺骨収集団) の若い男女学

生達が朝早くから受付・案内・設営などの応援に駆け付けてくれ、澁刺としたその活動振りに老兵達も元氣付けられ、正気に満ちていた。

昨年は、3月11日に発生した東日本大震災等の影響で合同慰霊祭の斎行が危惧されたにも拘わらず、この時にこそ、英霊の御加護の下、大和心を結集して、国難とも言われる大災害から立



国家「君が代」斉唱

ち直り、日本の再生・復興を実現すべきとの参列者の強い決意により、例年どおり立派に斎行された。あれから1年余、未だ復興への道程は遅々として進まず、被災地、引いて日本の未来像は殆ど画かれていない。党利党略に明け暮れる政治家、営利追及に走る企業家等々、公を思い、国を憂うるなきを悲しむ。この国の未来に託して尊い命を捧げた御英霊たちは、この現状をどううに御覧になっていられるであろうか。



献歌・世田谷コールエーデ合唱団 (指揮・大徳孝子氏)

この日は小雨模様の曇りとした天気ながら、参列者の出足は良く、定刻に式典は開始された。トランペットの伴奏 (田樽雅之氏) により、全員起立して国歌を斉唱した後、神官による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が執り行われ、次いでこの4月に、故山本卓眞理事長の後を継いで就任した島村宜伸会長が、公益財団法人海原会以下主催の参加慰霊40団体を代表して、別掲のとおり祭文を奏上したが、その中で特に、現在、我が国は、昨年3月11日、東日本地区を中心に未曾有の大災害に遭遇し、地震・津波・放射能の三重の甚大被害を被り、1年余を経過した今日においても、復興は遅々として進まぬ状況にある、私どもは、この試練の時にこそ、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれた先輩方の勇気と献身を改めて思い起こし、今一度国民一同奮い立って、先人から託されたこの美しい国日本の復興再建に一意邁進する覚悟であり、御英霊のなご一層の御加護と御導きの下、更なる慰霊団体協力の輪を広げ、慰霊顕彰事業の永続と国民精神の作興を図るため全力を傾注することをお誓い申し上げます。

次いで、奉納演奏は、世田谷コールエーデ合唱団 (指揮・大徳孝子氏) による日本の歌シリーズ「ふるさと」、「七夕」「遙かな友に」の3曲が奉唱され、美しいハーモニイが拜殿一杯に響いた。その後一同起立し、トランペットの

伴奏により「海ゆかば」を斉唱した。合唱並びに斉唱の声は神苑に届し、清風に乗って吹き渡り、英霊もさぞやお喜びの上、共に声を合わされたことであらう。

終わって、参列者一同は、「国のしずめ」のサクソフォン吹奏（鈴木隆春氏）の中、本殿に昇殿参拝し、玉串を奉奠して英霊奉慰の誠を捧げた。

## 直 会

式典を終わり、13時30分から、会場を靖国会館2階「玉垣の間」に移し、御来賓、参加団体各代表、賛助会員等約130名が参集して直会が執り行われた。直会はず、当協議会岩田司朗常務理事の開会の辞に始まり、同理事の司会によって進められた。

当協議会を代表して島村会長が、本日の合同慰霊祭式典が、滞りなく、厳粛かつ盛会裡に終了したこと、斎行に当たり、参加各団体から受けた絶大な御支援・御協力に厚く感謝の意を表するとともに、今後とも、慰霊顕彰事業の永続を図るため、一層の御支援を賜りたい旨の挨拶を行った後、御来賓の靖國神社極高晴宮司から、最近の靖國神社の祭事・催し、靖國神社を巡る諸情勢等につき報告があり、日頃から靖國神社の崇敬奉養に関する各慰霊

## 祭 文

本日、ここに、平成二十四年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで全戦没者の御霊に、慰霊顕彰の言葉を捧げます。

過ぐる大東亜戦争においては、多数の方々が、祖国と同胞の安寧を願い、アジアの解放と繁栄を実現すべく、広大な戦域に赴き、北は酷寒の地、南は酷暑瘴癘の地で、陸に海に、また空において、勇戦敢闘して散華されました。その数二百三十四万余柱に及んでおります。家族を故国に残して異国の地に散って逝かれた方々の無念と、一家の柱を失い、後に残された御遺族の方々の悲痛を偲ぶとき、今なお、万感胸に迫るものがあります。

今日、我が国、我が国民は、列国に伍して、世界でも屈指の自由と繁栄を謳歌しております。また、アジアの諸民族は独立して、人種平等の基本的道義も確立され、目覚ましい発展を遂げております。この偉大な歴史的成果は、大東亜戦争で散華された多くの戦没者の方々の、滅私の献身によって齎されたものであるこ

とを、私たちは決して忘れることは出来ません。

しかしながら今日、平和と繁栄が続く長い歲月の経過の中に、いつしか戦没者に対する敬意と慰霊の心が風化しつつあることが憂慮されます。加えて、最近の世相を眺めると、公に對する責任感が希薄化し、人倫に悖る行為も多発するなど、国民道義の頹廃が懸念されます。ここにおいて私どもは、戦没者慰霊事業の永続を希い、それを通じて国民道義の作興を図るため、戦没者慰霊諸団体と相諮り、大東

亜戦争全戦没者慰霊団体協議会を設立し、この目的のために、共に助け合い支え合うことを誓い合いました。設立後七年を経過した今、参加団体及び協力団体は四十団体を数え、本日のこの合同慰霊祭は、これら諸団体と共に斎行する運びとなったものであります。

私ども協議会及び慰霊諸団体は、慰霊活動協力の輪を拡げ、戦没者の慰霊顕彰事業の永続を図り、もって国民道義の作興を図るため、今後とも、全力を傾注して参る所存であります。折しも、我が国は、昨年三月十一日、東日本地区を中心に未曾有の大震災に遭遇し、地震・津波・放射能の三重の

甚大被害を被り、一年余を経過した今日においても、復旧は遅々として進まぬ状況にあります。私どもは、この試練の時に、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれた先輩方の勇氣と献身を改めて思い起こし、今一度、国民一同奮い立って、先人から託された、この麗しい国の復旧再生に、一意邁進すべく、覚悟を新たにするものであります。

ここに、戦没者慰霊諸団体と共に、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、この試練の時、どうか私どもに、なお一層の御加護とお導きを賜りますことを冀って、慰霊の言葉といたします。

平成二十四年七月七日

戦没者慰霊諸団体を代表して

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体  
協議会

会長 島村 宜伸



直会会場風景



挨拶・島村宜伸新会長



直会会場・来賓席



挨拶・京極高晴宮司



「海ゆかば」 斉唱



右トランペット奏者 田櫓雅之氏  
左サクソフォン奏者 鈴木隆春氏



「聖寿万歳」齋須重一顧問  
(陸士57期)



JYMA の学生達

団体の協力支援に感謝の意を表される  
とともに、英霊の慰霊顕彰業務の継続  
とより一層の発展を期待する旨の御挨拶  
があった。

次いで御来賓の紹介があり、御来賓  
を代表して東部ニューギニア戦友遺族  
会堀江正夫会長（陸士50期）の御発声  
により、一同靖國の御霊に献杯した

後、懇談会食に移った。

和やかな雰囲気の下に、懇談会食は  
約1時間に及んだが、その間にJYMA  
A（日本青年遺骨収集団）の学生代表  
山中亮君がJYMAの活動報告と今後  
の活動方針を遺骨収集の体験談を交え  
て披露し、若者を代表して今後とも慰  
霊顕彰を継承してゆく旨の決意を述べ

たことは、誠に力強い限りであった。  
また、JYMAが協力している「戦史  
検定」事業について紹介し、若者達に  
真実の歴史を認識させ、慰霊顕彰を永  
続するためにも、事業への理解と御支  
援をお願いしたいと挨拶した。終わっ  
て、トランペット（田櫓雅之氏）とサ  
クソフォン（鈴木隆春氏）の伴奏によ

り一同、御霊を偲んで「海ゆかば」を  
斉唱し、最後は、当協議会の齋須重一  
顧問（陸士57期）の御発声により、締  
めの献杯と「聖寿万歳」を高唱した後、  
司会者の閉会の辞とともに一同、来年  
の再会を約して解散した。  
誠に心洗われる思いの合同慰霊祭で  
あった。（飯田正能記）

## 平成24年度 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式

### 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

平成24年度厚生労働省主催の拝礼式が、5月28日(月)、新緑の千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、常陸宮、同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、厳粛に執り行われた。

墓前には、天皇、皇后両陛下御下賜の大花籠が供えられ、約580名の参列者がお迎えするなか、12時30分、両殿下が御臨場になられて式典は開始された。



参拝される常陸宮、同妃両殿下

列者全員が国歌「君が代」を斉唱し、次いで、西村厚生労働副大臣が、小宮山厚生労働大臣の「式辞」(後掲)を代読した後、同省清水社会・援護局長から手渡された御遺骨を奉持して「納骨の儀」を執り行った。

今回納骨堂に納められた御遺骨は、硫黄島、樺太、インドネシア、マレーシア、モンゴル、ミャンマー、パラオ諸島、ビスマーク・ソロモン諸島、マリアナ諸島において収容された1228柱で、これにより千鳥ヶ淵戦没者墓苑には合計35万6632柱の御遺骨が納められたことになる。

納骨の儀終了の後、参列者一同が起立する中、常陸宮、同妃両殿下が墓前にお進みになって深々と御拝礼、戦没者の御冥福をお祈りになられた。参列者一同も両殿下の御拝礼に合わせて拝



献花に向かう野田内閣総理大臣

礼。その後、両殿下は、一同がお見送りする中を、遺族に御会釈を賜りながら御退場になられた。

次いで、野田内閣総理大臣の献花、拝礼に続いて、関係閣僚、関係国駐日大使・領事、各政党代表議員、関係団体代表、遺族代表の献花、拝礼が行われ、最後に、古河千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会副会長が献花、拝礼を行って、13時15分、式典は滞りなく終了した。

その後、一般参列者やこの日に合わせて来苑した遺族・慰霊団体等の参拝が相次いだ。

### ○千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式式辞

常陸宮同妃両殿下のご御臨席のもと、戦没者ご遺族とご来賓の皆様にお集まりいただき、千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式を挙行するに当たり、一言ごあいさつ申し上げます。

先の大戦では、三百十万人が亡くなりました。このうち海外では、二百四十万人が、祖国の安寧を願いながら、苛烈な戦闘に倒れ、また、戦後、遠い異国の地でお亡くなりになりました。

政府では、海外にある戦没者の御遺骨を祖国にお迎えするため、昭和二十七年以降、多くの関係者の皆様とともに、遺骨帰還事業に取り組んでいます。昨年は、前年に引き続き、官邸に設置された「硫黄島からの遺骨帰還

のための特命チーム」のもと、政府一体となって取り組み、多くのご遺骨をお迎えすることができました。

しかし、戦後六十六年が経過した今もなお、多くの戦没者が海外で眠っています。厚生労働省としては、今後とも、ご遺族、戦友、ボランティア、民間団体など数多くの皆様の、一層のご協力もいただきながら、戦没者のご遺骨の帰還に力を尽くしていきます。

今年、硫黄島、樺太、インドネシア、マレーシア、モンゴル、ミャンマー、パラオ諸島、ビスマーク・ソロモン諸島、マリアナ諸島で収容した千二百二十八柱を新たにお納めします。これにより、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納められるご遺骨は三十五万六千六百三十二柱になりました。

この式典に当たり、改めて今日の日本の平和と繁栄の礎となられた戦没者の方々に深く思いを致し、謹んで哀悼の誠を捧げます。また、先の大戦から学びとった多くの教訓を次の世代に継承し、恒久の平和を確立すべく力を尽くすことをお誓い申し上げます。

終わりに、戦没者ご遺族の皆様のご平安を祈念いたしまして、式辞と致します。

平成二十四年五月二十八日

厚生労働大臣 小宮山 洋子



表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人JYMA日本青年遺骨収集集団」（平成20年度に改名。ただし、登記上は「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」と表示、英文表記は「Japan Youth Memorial Association」略称「NPO JYMA」）の機関紙（月刊）の題字であるが、その第149号（平成24年8月1日発行）によれば、同法人では、①硫黄島遺骨帰還第二次開削調査立会派遣、②同第一次通常派遣、③同第一回特別派遣、④サイパン調査応急派遣の4派遣隊に、それぞれ団員を派遣し、各々任務を終えて無事帰還したとのことである。

硫黄島における遺骨収容作業は、昨年より一般公募ボランティアを交えた「特別派遣」での作業地点であった滑走路西側の集団埋葬地での遺骨収容を完了し、次回の特別派遣以降、作業地を地下壕へと移す予定とのこと、今後政府の進める「硫黄島遺骨帰還プロジェクト」は、当初の計画より若干の変更も考えられるとのことである。

なお、右の各派遣団員の派遣概要報告を、次に転載させていただいた。

①硫黄島第二次開削調査立会派遣  
日程 平成24年6月14日～7月3日  
参加団員 和泉 永一（社会人）

【派遣概要】（報告・和泉 永一）

平成23年11月に示された「硫黄島からの遺骨帰還プラン」に基づき、平成24年度第2回開削調査立会が6月14日から7月3日までの20日間の日程で実施され、当法人からは1名が参加した。今回の調査は、23年度開削調査実施区域において確認された約百箇所の地下壕等の現地調査を行い、以後の遺骨帰還団が行う遺骨収容場所を選定し提言するものであった。

開削によって露出した壕内調査にあつては、調査に先立つ有毒ガス及び酸素濃度の検知、並びに不発弾等の除去が不可欠であることから、陸自隊員による支援を得て行われた。壕内は狭く熱く、深く掘り下げられているが、臆することなく酸素ボンベを背に潜入していく陸自隊員は「天晴れ」であった。調査結果に関して、収容場所とする地下壕等については、必要と見込まれる人員数と期間を見積もるとともに収容のための壕口周りの整備等について助言した。また、収容においては、壕内温度を極力低下させることが求められる

ことから、作成した壕内地図によって通気のための開削も行い、今後の収容をより容易とする環境を整備した。

期間中は晴天に恵まれ、調査に支障を生ずることもなく、平成23年度開削調査実施区域において必要とされる調査をすべて無事に終了することができた。

御遺骨が眠る壕が多数確認されているが、収容するまでには期間を要する

のが現状である。壕からの収容に当たっては、壕内の土砂を全て人力で取り除くことから、多数の人員と日数を要するためである。開削された壕からの御遺骨の収容も集団埋葬地からの収容と同様により多くの継続的な人的貢献が必要とされていることもお伝えする。

②硫黄島第二次通常派遣

日程 平成24年6月18日～6月30日  
参加団員 佐久間貴士（社会人）  
漆原 慶太（社会人）

【派遣概要】（報告・漆原 慶太）

硫黄島遺骨収容第二次通常派遣は、平成24年6月18日から6月30日までの全13日間で行われた。派遣団は、厚生労働省職員2名、日本遺族会6名、硫黄島協会7名、JYMA2名で構成されており、この17名で収容作業を行った。JYMAからは、社会人の漆原慶

太と佐久間貴士の両名が参加し、先発隊と後発隊に分かれて硫黄島へ向かった。

今回の派遣では、第一次、第二次開削調査で発見された壕のうち、御遺骨が見付かった壕の内部で収容作業をすることになった。

硫黄島の日差しはかなり強烈なるものがあるが、壕内の温度たるや70度に

近い場所もあり、その中を掘り進めようとすると、掘った先から息もし辛くなるような熱風に襲われる。岩石は手袋越しでも熱くて持てず、ミノザルに入れて運ばざるを得ず、土すらも熱くずつと触っていられないほどであった。作業の途中、度々、不発弾や液体の入ったアンブル等が出てきて危険な時もあったが、その気合いの入りようは凄じいものがあり、皆、汗だくになりながらも、全員一丸となって収容作業を行うことができた。

今次派遣でお迎えてきた御遺骨は14柱、決して満足できるものではないが、次回の派遣に引き継ぎやすいよう、壕内を確実に、くまなく探し終えることができた。硫黄島にはまだまだ沢山の御遺骨が眠っているので、今後、硫黄島へ遺骨収容に来る派遣隊の御活躍をお願いします。

③第一回硫黄島遺骨帰還特別派遣

日程 平成24年7月9日～7月17日  
参加団員 学生団員2名、社会人団員3名、計5名

【派遣概要】 (報告・斉藤 愛美)

平成24年度第一回硫黄島遺骨帰還特別派遣は、7月9日より7月17日までの9日間にわたって行われた。

硫黄島遺骨帰還業務は、平成22年8月、政府に設置された「硫黄島からの遺骨帰還のための特命チーム」を中心とし、政府一体となって御遺骨の帰還を推進しており、今回の派遣は、特命チームとして三度目の派遣となる。

今回の派遣における御遺骨収容は、昨年度に引き続き島内滑走路西側の集団埋葬地で行った。この地点は、米国調査資料の情報に基づく現地調査により発見され、昨年度までに998柱を収容した。作業は日本遺族会班、硫黄島協会班、小笠原村在住硫黄島旧島民の会班の3班に分かれて行い、7月11日より14日までの4日間の実施であった。作業中、同島では一カ月ぶりとなる雨が降ったり、スコールに恵まれたりして、幸いにも気温はそれほど上がらなかったが、容赦ない直射日光と砂地の照り返しのため、作業は30分毎に休憩を挟みながら行った。

今回の派遣による御遺骨収容数は、143柱であり、昨年度までに同地点

で収容した988柱と合わせて1141柱を収容した。また、今次派遣により、滑走路西側集団埋葬地の、派遣団による収容作業は終了となった。

これにより、硫黄島の御遺骨収容数は、1万52柱となり、約半数の御遺骨の収容を終えたことになるが、まだ本土に帰還できない御遺骨が約1万柱残っている。今後も1日でも早く、1柱でも多くお迎えできるように全力を挙げて取り組んで参りたい。

④サイパン遺骨帰還調査派遣

日程 平成24年7月8日～7月14日  
参加団員 小林万里子

【派遣概要】 (報告・小林万里子)

サイパン島タナバグ地区の集団埋葬地には、約20000㎡の敷地に2000～4000人埋葬されているという情報があり、かねてより5回にわたり遺骨収容を実施してきた。日本本土への帰還を果たした御遺骨は、これまで1253柱である。集団埋葬地は、海岸より約40mに位置しており、深さ2m前後のところから御遺骨が発見されている。

平成23年8月に行われた遺骨帰還応急派遣では、このタナバグ地区埋葬地において547柱の御遺骨を収容した

が、引き続き綿密な調査を続けてきたNPO法人空援隊より、当該場所での新たな残存遺骨情報か寄せられたことにより、試掘調査の実施が決定された次第である。

なお、現地では、当法人団員の属した政府派遣団員6名と、先発隊として2日前に現地入りしていた空援隊メンバー3名とが行動を共にした。本派遣では、埋葬範囲を特定することが目的であったが、調査の結果、御遺骨の存在が確認されたため、本年9月に遺骨帰還のための収骨派遣が実施される運びとなっている。

当初の予定よりも早く試掘調査を終えたため、作業日程の後半2日間は、自由行動として、現地協力者の証言や情報に基づいた残存遺骨調査が行われた。山林の中、草木を分け入り、あるいは岬の切り立った岩をよじ登り、壘壕跡を始めとする洞窟内の調査を実施した。

今般、新規残存遺骨及びそれに直結する情報に接触することは叶わなかったが、現地住民を始めとする情報提供者は非常に協力的な姿勢を見せており、先述の民間NPOを筆頭とした二国間の人々による地道な姿勢の賜物と言えよう。この事業においては何よりも現地の理解及び協力が欠かせない。

よって、この地での今後の活動に期待が掛かる。

7月8日―午前、成田空港より出国。現地到着後、試掘現場の確認と共に、地権者との打ち合わせを行う。

7月9日―当該地区の試掘調査開始。歴史保存局職員立会いのもと、現地協力者と共に重機を用いて試掘を行う。7月10日―継続して試掘調査を行う。金属探知機に反応して薬莖や爆弾片が多く見つかる。作業終了間際に上腕骨と思われる骨片が発見される。

7月11日―作業期間中に御遺骨が発見された場所の周辺を掘削し、「埋葬地」の区域の範囲を調査する。この際、多くの御遺骨や遺留品が発見され、次回集骨時の作業区域の凡そを特定。当該地区の試掘調査を終了した。

7月12日―自由行動。終日残存遺骨調査のために幾つかの洞穴内部に入る。バンザイクリフ横道より山中、海辺を経てやっと辿り着く調査地点もあり。何れにおいても生活跡が確認されるのみに留まる。

7月13日―自由行動二日目。引き続き残存遺骨調査を行う。途中、現地作業協力者より、自宅裏にて発見されたという小さな壘壕へ案内される。

7月14日―午後、サイパンより日本へ帰国。

日米硫黄島戦没者合同慰霊  
追悼顕彰式について(抄)  
硫黄島協会副会長 寺本 鐵朗

「編注・硫黄島における戦没者の慰霊  
顕彰業務を始め遺骨収容帰還業務等に  
献身的、かつ、精力的に取り組んでこ  
られた硫黄島協会(会長西泰徳氏)か  
ら、この程、標題の慰霊追悼顕彰式に  
関する詳細な報告書が送られてしまし  
たので、その一部をご紹介します。感  
意を表することといたします。」

平成24年3月14日、硫黄島南海岸の  
「日米再会記念碑」の前において、日  
米両軍の戦没者を慰霊する合同追悼顕  
彰式が日米の硫黄島協会主催で行わ  
れ、遺族や生還者、関係者ら約300  
名が参列し、慰霊碑に花や水を捧げ  
た。日本側の参列者は総勢180名  
で、国会議員16名、御遺族90名、外務  
省、防衛省(自衛隊を含む)、厚生労  
働省、官邸、報道関係者らであり、そ  
の大半は羽田空港から、外務省チャー  
ターの日米航空機で8時に出発し、10  
時に硫黄島に到着した。また、その一  
部は自衛隊機で入間基地から出発し  
た。

式典には、現地の海上自衛隊硫黄島

航空基地司令、航空自衛隊硫黄島基地  
隊司令も参列した。

硫黄島滞在の自衛隊員達には、絶大  
なご支援・ご協力を頂き、心より感謝  
申し上げます

式次第

- 司会 ウイリアムDマイク1等軍曹
- 硫黄島協会副会長 寺本鐵朗
- 式前演奏 陸上自衛隊中央音楽隊
- 第3海兵遠征軍音楽隊
- 開式の辞 硫黄島協会副会長寺本鐵朗
- ウイードハン大佐 (海兵隊退役)
- 国旗・軍旗入場 日米カラীগード
- 日米国歌演奏 陸上自衛隊中央音楽隊
- 祈りのことば 第3海兵遠征軍音楽隊
- スコット・シェイファー大尉
- 日本側 追悼のことば
- 硫黄島協会 会長 西 泰徳
- 硫黄島問題懇談会会長 衆議院議員 逢沢 一郎
- 衆議院議員 新藤 義孝
- 衆議院議員 山口 壮
- 外務副大臣衆議院議員 山口 壮
- 米国防 追悼のことば
- 米國務省代表 駐日米国大使館
- 主席公使 カート・トン

米軍代表 第3海兵隊遠征軍司令官

ケネスJ. グラック中将  
米退役軍人代表 米国硫黄島協会  
名誉会長 ラリー・スノードン

海兵隊退役中将

日本側 献花・献水

追悼のことば奏上者4名の他

厚生労働大臣政務官

衆議院議員 津田弥太郎

防衛大臣政務官

衆議院議員 神風 英男

陸上自衛隊幕僚長陸将 君塚 栄治

海上自衛隊硫黄島航空基地隊司令

1等海佐 佐藤 達朗

航空自衛隊硫黄島基地隊司令

1等空佐 飯島 泰明

米国防 献花

追悼のことば奏上者3名の他

米退役軍人代表 米国硫黄島協会

会長 ヘンリー・スタックボール

退役中将

黙祷(30秒) 式典全参列者

鎮魂ラッパ 前同

軍旗・国旗退場 前同

閉会の辞 前同

以上

合同慰霊追悼顕彰式終了後、「硫黄

島戦没者の碑」(碑文・さきの大戦に

おいて 硫黄島で戦没した二万余名の

将兵をしのび その霊を慰め 国民の

追悼の思いをこめてこの碑を建立する

平成17年3月 補修工事により現在

の硫黄島戦没者の碑が完成)の前に移

動し、引き続き硫黄島戦没者慰霊追悼

式を挙行した。追悼式終了後、マイク

ロバスに分乗して島内の慰霊巡拝を行

い、それぞれ戦没者終焉の地を巡って

ご冥福をお祈りした後、16時30分硫黄

島を離陸して、18時40分羽田空港に無

事帰着した。

慰霊彰式、慰霊巡拝等を行うに当た

り、関係省庁並びに自衛隊硫黄島基地

隊、鹿島建設株式会社現地工事事務所

等関係者のご支援、ご協力に心から感

謝申し上げます。

○追悼のことば

硫黄島協会会長 西 泰徳

本日硫黄島南海岸の黒い砂浜に建つ

「日米再会記念碑」前におきまして日

米両国硫黄島戦没者慰霊追悼顕彰式を

開催するに当たり、米国の来賓の方々

のご臨席を迎え、盛大に執り行われま

すことを感謝いたします。

申すまでもなく、先の硫黄島の戦い

は、世界の戦史に類の無い熾烈を極め

た悲惨な戦いでありました。日米両国

の多くの勇士達は等しく祖国を想い、

最愛なる妻や子や敬愛する父母兄弟姉

妹たち肉親への、断ち難い深い絆を断たれ、最後の一瞬まで真の平和を願って、尊い命を亡くされて逝ったことと、思います。ここに謹んで日米両国戦没者のご冥福をお祈りすると共に、ご遺族の方々の終生消えることのない悲しみをお慰めいたします。

今では世界の歴史に残る硫黄島の戦いの記憶も、世代も変わり風化しつつありますが、私達はあのような悲惨な戦いを二度と繰り返さないよう永く後世に、正しく語り継いでゆく義務と責任を果たすべく、共に残る余生の全てを捧げようではありませんか。

そして、ここ硫黄島を「太平洋の平和の架け橋」として万世の太平を開くため、互いに心と心の固い絆で日米両国の更なる友好親善に尽くして参りたく思います。

終わりに臨み、本日この席にご参列下さいました日米両国の方々の益々のご清祥とご多幸を祈念致しまして、私の追悼のことばといたします。合掌  
平成24年3月14日

### ○追悼のことば

遺族代表・衆議院議員 新藤 義孝  
私たち硫黄島戦没者の戦友並びに遺族は遠路いらっしやいました米国硫黄島協会の皆様と再会できたことを嬉し

く思います。かつて戦いを交えた者同士が集い、合同で慰霊追悼を行うのは世界でただ一カ所、ここ硫黄島であることを誇りに思い、深い感激を覚えます。

唯一残念なことは、私達の友人である元米国硫黄島協会会長ヘインズ将軍と二度と会えなくなってしまったことです。日米における硫黄島戦没者慰霊に対するフレッド・E・ヘインズ海兵隊退役少将の大いなる功績を讃え、安らかなる永眠を心よりお祈り申し上げます。

67年前、この島の戦闘は熾烈を極め多くの戦死傷者を出し、硫黄島は歴史に名を残すことになりました。日本の兵士たちは50度を超えるような地下壕に耐え、食べる物も飲む水もないまま必死に戦い抜きました。圧倒的な兵力差の中で、追い詰められた人々は、逃げずへこたれず、最後まで自らの役を果たしました。一体何のために、そして、何故そこまで踏み止まることのできたのでしょうか。

この灼熱の地獄で闘った兵士達は、正に故郷に残された両親や愛する人たちのために耐えようということだったと思います。

ここ硫黄島での壮絶な戦いは、クリント・イーストウッド監督の手により

日・米双方の視点から見た二つの映画となり、アカデミー賞を受賞するなど世界中に話題を呼びました。そして、映画から分かったことは、この激しい戦いに臨んだ日本人の気持ちと、アメリカ人の気持ちは同じ想いだった、ということでした。それは「自分達の大切なものを守るため」でした。同じ気持ちを持つ兵士達が何故戦わなくてはならなかったのでしょうか。イースト

ウッド監督は「戦争は若者の未来を奪う悲惨なものだ。しかし、家族や大切なものを守るために犠牲となった人たちのことを我々は尊敬し、絶対に忘れてはならない。そのことを世界中の人に知らせたい」と語ってくれました。

私たちが遺族は、祖国のため、家族のために戦った先人に心より哀悼の誠を捧げるとともに、この事実を風化させないよう次の世代に伝えていかななくてはなりません。

この島の遺骨収集は未だ5割に届かず、時間の止まったこの島で1万2千人余りの方々が眠り続けていることを多くの皆様に知っていただきたいと思

います。  
私たちは全員の御遺骨が故郷にお帰りいただくまで活動を続けて参ります。そして、現在の平和と繁栄が多

くことを心に刻み、日米両国民が引き続き協力して世界の平和と安定のために一層努力してゆく決意を改めて誓うものであります。

本日の合同慰霊式の開催に当たり、多大の御支援をいただきました硫黄島基地を始め自衛隊の皆様、外務省、厚生労働省、政府関係者並びに在日米軍関係者のご協力に厚く感謝申し上げます。

平成24年3月14日

### ○追悼のことば

第3海兵隊遠征軍司令官

ケネスJ. グラック海兵隊中將

「名誉の再会」67周年

硫黄島 2012年3月14日

日米の硫黄島の戦い経験者の皆様、ご家族ご友人の皆様、来賓の皆様、おはようございます。ご出席の皆様の前で、この神聖な地でご挨拶ができることを名誉とし、ありがとうございます。

この式典は、67年間そうであったように、記念すべき式典です。しかし、この式典の意味は、西太平洋にある小さな離島をめぐる英雄的な戦闘の単なる記憶というよりもはるかに重いものです。我々のような人々が毎年この島に集まる理由は、人それぞれ様々で

す。しかし、硫黄島へ何度も帰って行く人々は皆、一つの目的を持ってこの島に來ています。それは、日米の戦役者を追悼するためです。

この島の熾烈を極めた戦場で戦った兵士たちを追悼するため、日米同じように、そして最も恐ろしい条件・状況の中で示された信じられないほどの兵士たちの武勇を顕彰するためです。この島を死守するために犠牲となった日本側守備隊2万2千人の勇敢な兵士たちの大部分、また、2万6千人の米側の勇敢な兵士たちもこの島を巡る戦いで戦死あるいは負傷した者たちの多くが、若く、熱意を持った無邪気な若者たちであり、自身の運命を変える術もなく、結果として、若い盛りの中でその尊い命を奪われてしまった。もう一度、彼らに追悼の誠を捧げましょう。彼らの人生が何であつたかに思いを致し、彼らの究極の犠牲と無私の軍務だけでなく、もし日米両国が戦争に巻き込まれていれば、彼らの人生がどのようになつていたかにも思いを巡らせてください。また、最も深い尊敬を持ってこの地で戦い亡くなられた兵士たちの家族や愛する人々にも思いを致してください。彼らも、愛する者と一生の間持てたであろう宝の経験を奪われませんでした。

数多くの兵士たちの死が無駄ではなかつたことを今日ここで再確認しましょう。我々は、今日ここに二つの偉大な国家を代表して集まりました。日米は、人類史上最も成功したと言われている日米同盟は、世界の中でも最も重要なこの地域で、60年以上も平和と安定を達成しております。この島で67年前に、日米両国の最も勇敢な兵士たちを数多く失つたことは、他の何よりも、この日米同盟の樹立と成功に寄与しています。我々はこの神聖な島に、敵としてではなく、平和を愛する人々として戻ってきました。この島で戦つた兵士たちの献身と犠牲は、平和と安定を生み出し、かつての敵同士が友人になれることを顕著に示しました。

皆さんの多くがご存じのように、去年この島での式典は、3月11日に日本を襲つた大震災の後、土壇場で中止となりました。トモダチ作戦は世界が経験したことのない複雑な危機、マグニチュード9の地震に続く恐ろしい津波、原発事故に対応して遂行されました。しかし、災害の後にも光明が來ました。自衛隊と米軍が感動的なチームワークで即座に対応したこと、日本人の見た回復力、勇氣、そして、日米同盟の力強さが示されました。「トモダチ」、友情を表すこの言葉は、この

硫黄島でその根を張り始めたのだと思ひます。

終わりに、皆様にお願ひしたいことですが、式典の後、この島を巡る際には、この島で戦い、そして犠牲となつた兵士たちのことをどうぞ思い出してください。彼らの苦しみと犠牲によって日米両国が恩讐を超えて一つとなり、世界をより良い場所に行っているのです。67年前に苦しみ、そして犠牲となつた兵士たちは、国家の求めに応じて任務を果たしてきました。彼らの名譽のために、我々は、引き続き同盟を強化しなければなりません。多くの犠牲の上に築かれた平和と安定を脅かすものを抑制し、必要とあらば打ち負かすために。

この硫黄島で苦しみ、犠牲となつた兵士たちに神の恵みがあらんことを、ご遺族と今日の式典参加者全員に神の恵みがありますように。これまでどおりの日米両国に神の恵みと、両国が引き続き共に手を携え、世界中の全ての良いことを守るために。ありがとうございます。

○追悼のことば

米国硫黄島協会名誉会長  
ローレンス E. スノードン  
海兵隊退役中將

(第4海兵師団—硫黄島—1945)  
「名譽の再会」67周年  
硫黄島 2012年3月14日

67年前、第二次世界大戦の戦闘の中でも、最も意義深い戦闘の一つに、究極の犠牲を払われた日米両国の将兵らに敬意と哀悼を表す機会を得るため、今日再びこの島の黒い砂の上に、また立てることに私個人として深い感慨を覚えます。

自ら望んでこの島に來た者は誰一人としていませんでした。我々は、国家及び軍隊の指導者の求めに応じてこの島に展開し、そして任務を果たしました。日本側の守備隊は、天皇への忠誠から、この島を守るため勇敢に戦いました。攻撃側も、故郷に帰り家族と再会できることを願いつつ、勇敢に戦い、任務を果たしました。双方とも、平和な世の中であれば多く成し遂げられたであろう数多くの若者たちを失いました。双方のご遺族の皆様は、戦争の対価である深い悲しみを味わいました。この地で亡くなられた方々の魂が安らかに眠られることを、ご遺族の皆様と亡くなられた方々との思い出が幸せな日々のみであることを願ひます。

67年前、仇敵同士であつた我々は、その後、友人となり、我々の同盟関係は、今や世界で最も強固なものとなつ

ていることは、本当に喜ばしいことです。去年、東日本大震災の際、米海軍・海兵隊チームが、いち早く被災地に救援に駆け付けたことが、このことを最も顕著に表しています。

日米両国の間には、時には問題も発生します。解決に長時間掛かる政治的な問題です。しかし、両政府とも、小さな問題で両国の長期にわたる相互の政治的、経済的、そして安全保障の利益を損なうことは決してないということを知っています。テロとの戦いは、長い戦いです。それ故に、日米のパートナー関係もこれまで以上に、将来より重要なものとなります。

この島で亡くなられた兵士たちのご遺族の皆様は今一度お悔やみを申し上げます。両国の生存者たちとまた来年、再来年と、これから先も、この島で犠牲になられた兵士たちを追悼する機会があることを願います。犠牲者らの魂が、神々の腕の中に永久に抱き続けられることを願います。

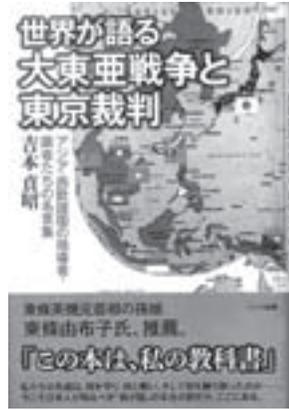
以上

## 新刊図書紹介

○吉本貞昭著

『世界が語る大東亜戦争と東京裁判』—アジア・西欧諸国の指導者・識者たちの名言集—

(株)ハート出版発行・装幀神崎夢現・平成24年7月14日第1刷発行)



「インドが今日独立できたのは、日本のお陰である。それはひとりインドのみではない。ベトナムであれ、ビルマであれ、インドネシアであれ、西欧の旧植民地であったアジア諸国は、日本人が払った大きな犠牲の上に独立したのである。我々アジアの民は1941年12月8日をアジア解放の記念日として記憶すべきであり、日本に対する感謝の心を忘れてはならない。」インドのラダ・クリシュナン第二代大統領の言葉である。1941年(昭和16年)

12月8日は、大東亜戦争の開戦記念日である。そして、1945年(昭和20年)8月15日、日本は武運つたなく、矛をおさめて、連合軍に屈したとはいえ、日本の決断と行動によって覚醒させ、力づけられたアジアの諸国・諸民族の植民地解放と独立への運動は、その後第二次大東亜戦争とも言えるそれぞれの解放・独立戦争を経て、見事に実を結んだのである。

アメリカは戦後、昭和20年11月3日に、日本が再び連合国の脅威にならないよう、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥に対して、日本人の洗脳計画を命じた。その計画という贖罪意識を植え付ける「戦争犯罪情報計画」(ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム)と呼ばれるもので、報道と教育を通じ、アメリカに都合の良い歴史観を日本人に植え付けることを目的としたものであった。

その最初のプロジェクトは、昭和20年12月8日から全国の新聞に10回にわたって連載された「太平洋戦争史」であった。この連載記事は、満洲事変から終戦に至るまでの日本の侵略戦争を強調したもので、翌日からはNHKのラジオを通じて「太平洋戦争」をドラ

マ化した「真相はこうだ」の放送を開始した。これと平行して、極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判を強行し、この裁判を通じて、日本を世界で最も好戦的で野蛮な国家に仕立て上げることによって、日本人から自信と誇りを奪っていくのである。

一方、戦後の日本人も、67年もの間真実を封印した歴史教育、「戦争犯罪情報計画」の下、いわゆる東京裁判史観に基づいた教育のせいで、過った歴史認識を持った国民が増え、反対に、正しい歴史認識を持った戦中派の国民が減少するという、大きな転換点に差し掛かっている。それと同時に日本人のモラルが急速に崩壊してきており、これは正に、亡国の前兆と言えよう。かつてドイツ近代歴史学の祖ランケが「国民が誇りを失えば、その国は滅びる」と述べたように、日本人は、かつて富の獲得だけに血道を上げ、遂に古代ローマ帝国に滅ばされたカルタゴのように、まさしく滅びの方向に向かっていっていると言っても過言ではないのである。この滅亡への道から再生への道に転換するには、日本人が戦前に持っていた自信と誇りを取り戻すしか、他に方法はないのである、と著者は強調している。正に同感である。

本書は、その題名が示すように、国

内外の豊富な史・資料を丹念に収集、解説し、「第二部 世界の指導者と識者が語る大東亜戦争の真実」(タイ、マレーシア、カンボジア、シンガポール、インドネシア、インド、ビルマ、スリランカ(旧セイロン)、フィリピン、韓国、台湾、中国、南アフリカ、アメリカ、イギリス、オランダ等世界の16カ国110名の指導者、識者の名言・証言集)及び「第四部 世界の指導者と識者が語る東京裁判の正体」(インド、中国、韓国、台湾、メキシコ、アルゼンチン、エジプト、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オランダ、オーストラリア等世界の13カ国58名の指導者、識者の名言・証言集)に纏め上げた労作である。東條英樹元首相の孫娘であるNPO法人環境保全機構理事長の東條由布子氏が、本書の推薦文で、この本は、「私の貴重な教科書」、「ここに書かれている内容を日本人が知ったら、きつと占領軍による洗脳が一気に解けてしまう」と述べられているが、同感である。

著者は、本書の後書きで、村山元首相は、いわゆる「村山談話」の中で、どのような根拠で大東亜戦争を「侵略戦争」と断定するのだろうか、と疑問を感じたのがその端緒で、この歴史認識を覆すには、一次史料や当時の関係

者の証言はもとより、被侵略国と呼ばれるアジア諸国の人々の証言を集めるしかないと思いつたとのことであるが、その史・資料収集の過程で、靖國神社遊就館に展示してあるビルマの最高殊勲賞「オンサン旗」やインドネシアの功労勲章「ナラリア勲章」を見た時の感激を、忘れることはできない、と述べている。

また、ビルマ独立義勇軍(BIA)出身のネ・ウイン元大統領は、昭和56年1月4日に、ビマ独立に貢献した日本人7名(元南機関メンバの機関長鈴木敬司大佐の未亡人鈴木節子氏、杉井満氏、水谷伊那雄氏、川島威伸氏、泉谷達郎氏、鈴木八郎氏及び高橋八郎氏)を大統領官邸に招いて「オンサン旗」を授与したこと、南機関が戦時中に結成したBIAから発展した現在のミャンマー国軍の将校は、日本軍から学んだ精神的遺産である愛国心、名誉心、自己犠牲の精神を継承していること、また、ミャンマーの国営テレビ放送は軍艦マーチで始まり、曲に合わせた軍のパレード、演習風景などが映し出されること、ミャンマー国軍の組織は、ほぼ完全に旧日本軍を踏襲していること、一方、インドネシアのナラリア勲章は、昭和63年8月17日に、インドネシアの独立と復興に尽くした6

名の日本人(前田精、高杉晋一、清水齋、小笠原公昭、稲嶺一郎及び金子智一)に対して、スカルノ大統領より授与されたこと、東京・銀座4丁目のインド料理店ナイルレストランの店主G・M・ナイル氏の父親A・M・ナイル氏は、昭和3年3月に来日し、京都帝国大学工学部を卒業後、インド独立運動の指導者ラシシュ・ビハリ・ポー

ス氏(新宿・中村屋にカレーライスの作り方を伝授した人でもある)の片腕としてインド独立連盟の結成に関わった人であり、戦後も帰国せずに、昭和25年から最初のインド料理店を銀座4丁目に開店し、東京裁判で唯一人、日本無罪論を主張したインドのラダ・ビノード・パール判事が、戦後3回にわたって来日した際、全国各地への講演旅行を行い、通訳者として活躍したこと、等々多くのエピソード・秘話も紹介している。

とである。中川聖氏は、昭和34年北海道生まれ、平成12年北海道大学大学院修了後、中国社会科学院研究生として留学。平成14年より旭川大学地域研究所特別研究員(専攻は中国経済論及び中国現代史)として研究の傍ら、大東亜戦争の開戦原因、意義等を研究中である。また、特攻隊の史実やその戦果等にも詳しく、その研究成果の一部を、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会の会報「特攻」第90号(平成24年2月発行)に「大東亜戦争と神風特別攻撃隊―日本はなぜ世界で尊敬されるのか―」という題名の論考を寄稿しておられるが、同論考を基に、加筆補正された著書『世界が語る神風特別攻撃隊―カミカゼはなぜ世界で尊敬されるのか―』が、同じ出版社(株)ハート出版)から平成24年7月30日、第1冊が発行されている(同じく、定価・本体1600円+税)。

なお、著者の吉本貞昭はペンネームで、本名は中川聖氏であり、昭和20年9月14日、市ヶ谷台に於いた第一総軍司令部の自室で、自ら敗戦の責めを負い、同総軍司令官杉山元帥の後を追って割腹自決を遂げた、同総軍司令部付吉本貞一陸軍大将の親戚に当たることから、同大将を敬愛して、吉本貞昭のペンネームを使っているとのこ

併せて、是非、御一読をお薦めしたい。  
○発行所「株式会社ハート出版」  
〒171-0014  
東京都豊島区池袋3-9-23  
TEL 03-3590-6077  
FAX 03-3590-6078  
定価 本体1600円+税

## 事務局からの報告等

### 一 平成24年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭の斎行

1 7月7日(土)、靖国神社において、当協議会が参加団体と共に斎行した平成24年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、雨模様の天候ながら、多くの会員の皆様の御支援、御協力を得て無事終了することができました。

大勢の皆様の御参列に心から感謝申し上げます。今回も昨年同様、全国津々浦々の多くの会員の皆様から、在宅参拝の御意向に添えて、玉串料及び御寄附をお届け頂きました。戦没者慰霊に寄せる皆様のお心を強く感じました。

御芳志誠に有り難うございました。

当日は、京極高晴靖国神社宮司、志摩篤偕行社理事長、藤田幸生水交會理事長、竹河内捷次つばさ會會長、森田次夫日本遺族會會長代行始め多くの御来賓に御参列いただき、盛会裡に式典及び直会を実施することができました。自衛隊からは、統合幕僚長代理を始め、陸・海・空各幕僚長代理にも御参列いただきました。

式典参列者は174名、直会参加者は123名、在宅参拝者は108名を

数えました。また、昨年に引き続き、世田谷区民吹奏楽団及び世田谷コーリエー合唱団の御奉仕・御協力をいただきました。

なお、来年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、平成25年7月6日(土)に斎行の予定です。多くの皆様の御参加をお願い申し上げます。

#### ◇主催団体

- ・公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
- (以下あいうえお順)
- ・公益財団法人海原会
- ・英霊にこたえる会
- ・エラブカ東京都人会
- ・公益財団法人偕行社
- ・鹿児島偕行会
- ・神奈川県偕行会
- ・旧戦友連
- ・近畿偕行会
- ・熊本偕行会
- ・熊本歩兵第二二五聯隊戦友会
- ・群馬偕行会
- ・興亜観音を守る会(永代会員)
- ・NPO法人国民保護協力会
- ・埼玉偕行会
- ・佐賀県偕行会
- ・NPO法人JYMA
- ・震洋会

- ・公益財団法人水交會
- ・全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛會(永代会員)
- ・全国近歩一会(永代会員)
- ・全国甲飛會(永代会員)
- ・全国ソロモン會
- ・全ビルマ會
- ・ソ連強制抑留戦友會東京ヤゴタ會
- ・公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協會
- ・筑後地区偕行會
- ・公益財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕會
- ・つばさ會
- ・東京都郷友會
- ・東部ニューギニア戦友遺族會
- ・特攻殉国の碑保存會(永代会員)
- ・公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰會
- ・豊橋歩兵第十八聯隊戦友會
- ・姫路偕行會
- ・福井県偕行會
- ・宮崎県偕行會
- ・山口県偕行會
- ・予科練雄飛會
- ・陸士第五十三期生會
- ・陸士第五十七期同期生會

(永代会員)

### 二 業務・会計監査の実施

当協議会は、4月19日(木)、当協議会事務局において、平成23年度の業務・会計監査を受けました。監査の結果、事業は適切に執行されており、また、会計事務についても適正に処理されており、異常は認められないとの報告を受けました。

- ・監査人 阿部 軍喜(公認会計士)
- ・同 内田 十充

### 三 平成24年度第1回通常理事会及び定時評議員会の開催

1 5月22日(火)、当協議会の会議室において、平成24年度第1回通常理事会を、また、靖国会館「田安の間」において、同定時評議員会を開催しました。

本会議は、いずれも島村新会長出席の下、事務局から提出された議案について熱心な討議が交わされました。その結果、事務局案はそれぞれ原案どおり承認されました。

なお、本会議には、監事1名の出席を得るとともに、昼食時には、会長、理事、監事、評議員が一堂に会して意見交換を行いました。

2 理事会  
① 議案

- ・平成23年度事業報告(案)
- ・平成23年度決算報告(案)
- ・役員人事

② 出席者  
理事10名全員及び監事2名中1名出席。

3 評議員会  
① 議案

理事会に同じ。  
② 出席者及び議長  
評議員13名中11名、ほかに島村会長、

長、柚木理事長、監事1名、事務局から岩田常務理事が出席。  
・議長 野口清秀評議員

四 硫黄島遺骨帰還等事業への参画について

当協議会は、昨年度に引き続き、「硫黄島遺骨帰還等派遣費補助金」の事業実施主体として選定されました。今年度の第1回特別派遣が7月9日から同月17日の間実施され、当協議会からの派遣団員として隊友会2名、偕行社及び水交会から各1名、計4名が参加し、御遺骨の収容に献身されました。今後の派遣に際しては、協力団体からの御希望を聴取しつつ、派遣要員を

選定する予定です。

会員の皆様におかれましては、この事業への参加を希望される方は、偕行社、水交会、つばさ会、隊友会、日本郷友連盟の各事務局、又は当協議会事務局に直接、お問い合わせてください。

五 慰霊祭等への参加状況

平成24年5月28日(月)、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、同拝礼式が行われ、当協議会から島村会長、柚木理事長及び岩田専務理事が参列しました。

平成23年度合同慰霊祭参列者及び寄附者名簿

(敬称略・五十音順)

秋上 眞一	阿久沢信吉	浅野 夏子	竹本 佳徳	田澤 昌成	田沼 久佳	阿部 敏行	新井 郁男	荒木精之介
穴山 正司	綾川 良清	新井 文央	津島 裕	富樫 利男	所 勝利	有川 信男	石塚 健一	市来 徹夫
新井 光雄	荒井 和彦	飯田 正能	所 啓子	富田 定幸	内藤壽美子	今井五十二	今岡 勲	今岡ミエ子
石川不二夫	石橋 聰	伊集院雅英	中江 仁	長岡 晃夫	中川 法宏	井本 尚宏	岩澤 漸二	宇井 忠一
和泉 永一	磯田 健一	板垣 正	中島 實	中原千鶴子	奈良 保男	上田 全喜	上原 富次	鶴飼 昇
市岡 実	市川 雄一	稲垣 雅子	西 正昭	根本 東洋	野口 清秀	上田 全喜	上原 富次	鶴飼 昇
井上 達昭	井上 達雄	茨木 治人	野中 正一	橋本 孝一	羽瀨 徹也	氏木 武	内田 十允	浦浪 臣晃
今井五十二	岩崎 高明	岩瀬 秋	浜口 六郎	林 建	原田 太郎	海老 忠夫	太田 實	大穂 利武
岩田 司朗	上田次兵衛	内田益次郎	樋口 太	日高 誠	平岡 辰夫	岡 達夫	尾関 基	小貫 達雄
梅木 一美	浦江 幸彦	漆原 慶太	平岡 辰夫	廣嶋 文武	福田 一彌	小沼 愛	小畑 威	加藤嘉之輔
大崎 朝秀	大西 貫也	大穂 園井	藤田 幸生	藤原 文武	堀江 正夫	川野 周平	川村 文子	北村 信也
大穂 孝子	大森 陽美	緒方 威	本多 宏隆	牧内 節男	町田 速雄	北村 昭正	吉川 裕男	木村 東馬

平成23年度合同慰霊祭在宅参拝者及び寄附者名簿

(敬称略・五十音順)

緒方 繁代	長田二三男	小田村四郎	松岡 広哲	松田清次郎	松田 好子
小田原健児	金子 敬志	鴨尾 進	松田 純清	松本 幹	松本 典子
菊地 勝夫	菊地 運一	菊池 正一	丸山美恵次	皆本 義博	宮代喜美夫
木島 壽雄	北川 伸	倉形 桃代	深山 明敏	武藤 孝行	森田 次夫
黒木 豊	小池 勝夫	古賀 英松	森本 浩吉	矢吹 朗	山内 康司
小鹿 勝見	小林 武一	齋藤 重一	山縣 大樹	山際 崇之	山口 浄秀
斎藤 直成	齋藤 愛美	齋藤 文彦	山口 美朝	山極 佑斗	山谷えり子
佐久間貴士	佐藤 政博	佐藤 彰男	山名 博	山中 亮	山本 健
佐藤 和夫	佐藤 建次	柴田 誠悦	山名 文夫	横瀬 富一	吉浦 健志
柴原隆太郎	志摩 篤	島村 宜伸	吉野秀一郎	依田 和彦	若木 利博
清水 好男	清水 昭俊	白石 一朗	若松 重英	渡部 祐子	
新郷 勝亮	杉澤 英雄	杉村 俊一	世田谷コーレエーデ合唱団員16名		
杉本 幹男	杉山 蕃	助村 隆典			
鈴木 隆春	瀬尾 昌平	関口 正孝			
高崎啓一郎	高橋 義洋	高橋みさき			
高橋 正美	高久 薫	高山 寛			
宝 新	竹河内捷次	竹田 五郎			
田槽 雅之	田山 莉奈	辻 外文			
津島 裕	富樫 利男	所 勝利			
阿部 敏行	新井 郁男	荒木精之介			

(以上174名)

木本	太助	工藤重民	倉谷三男四郎
河野	通也	駒場剛太郎	酒寄和郎
塩田	章	柴田邦雄	清水典郎
白川	浩司	杉田繁春	杉原清之
鈴木	至	高田耕治	高根和成
高村	克復	武田健策	多治見國正
辰巳	泰造	田中慶夫	谷垣尚
谷辺	勝啓	田村潤二	多和田忠
津覇	実雄	百目鬼清	永井一成
中川	巖	長澤剛	中濱範夫
中山	二郎	南雲芳郎	成田一成
西垣	幸三	西嶋正幹	能勢忠典
野村	彰	橋本光彦	畠間成允
廿日出昭信	花村龍男	早田亮彦	
原照寿	原田義治	藤井常男	
藤井弥五郎	布施木昭	別所末一	
星康之	堀田鐵男	本莊良介	
眞方侃	松田幾郎	松本茂	
松本栄三郎	丸原功	水内三郎	
峰守貴雄	宮川一二	宮澤作太郎	
三輪長正	森可成	森田勝市	
門馬秀行	八木セツ子	八木謙二	
矢口滋子	安富東洋	梁瀬正	
山田隆二	山本健雄	吉田治正	
吉元忠	若月良介	若林繁雄	

(以上108名)

### 新入会員名簿 (敬称略)

(平成24年3月1日～7月31日)

#### 【賛助会員】

(五十音順)

小渡朝義 三代 憲良

### 会報『慰霊』合併号の発行について

会報『慰霊』は、例年、1月、4月、7月、10月の年4回発行しておりますが、諸般の事情により、本年度は、7月号と10月号を合併号として、9月1日に発行させていただきます。御了承ください。よろしくお願いいたします。

### 会費納入のお願い

平成24年度の会費未納の方は、速やかにご払い込みくださるようお願い申し上げます。

なお、本年度会費未納の方には、郵便払込用紙を同封してあります。

### ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協議会事務局に任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません。必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記当協議会事務局宛とさせていただきます。

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内・地階

(公益)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局

電話 03-6380-8943  
FAX 03-6380-8952

### 当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、戦没者慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の当協議会会員ご加入を待ちしております。

皆様のご協力をお願いいたします。会員の区分と年会費は次のとおりです。

- 一 賛助会員  
(本会の趣旨に賛同する個人)  
年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員  
(特別「芳志」の賛助会員)  
年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員  
(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)  
年会費 一〇〇〇〇円
- 四 特別会員  
(本会の趣旨に賛同する法人・団体)  
年会費 一口一〇〇〇〇円  
(二口以上)